群書類從

百卅九上

内閣文庫
和書
類 一八六九〇 號
六六六 冊
三六函 四架

内閣文庫
和書
類 一八六九〇 號
六六六 冊
二五函 二〇架

内閣文庫
番號 和18690
冊數 666(197)
函號 215 3

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類集卷第百卅九上

和歌部四

淺草文庫

換換保己一集

玄玉和歌集序

一橋之印

昌平坂學問所

夫和歌者起自八雲之古風傳爲吾朝之習俗用之鄉國用之鄉人諷喻之道莫先於此爰代々詞伯奉詔命而撰集之家々好事稱斤斧而編次之而身既爲桑門之叢品詞雖沉花之藻只慙換近代綺靡之句式爲下愚素困々玩之餘首成部彙十有二連豈袖吾曰玄玉和歌集而已

国立公文書館
National Archives of Japan

ちはやぶるかみとなのりをきくときはこゝろもくゝにかはるなりけり

きてみれはこゝろもくゝにかはるなりけりとはしらぬ人のこゝろを

きてみるにこゝろもくゝにかはるなりけりとはしらぬ人のこゝろを

是はまたはらにもしらぬ人をやけくあさてらすとなるなり

玄恵和歌集巻第一　四十六首

神祇哥

攝政前太政大臣

百首哥のうちに神祇哥

皇太后宮大夫　後成卿

神風やいせの山川のきよきせに

百首歌の中に初なるを

法性寺殿　建治百首

かもしはしすゝきをかへしみもすそ川のきよきせのあさの

屋つたの紅葉はいまはかりなるかやい年ふるかの月

中臣のすゝめの入間の時の山風に春日祭をそもふ

いにしへの国をはらはせかの

攝政前太政大臣

いにしへのかはらはなをひくかはをたゝ涙をしのぶ川の

同時廉風に賀茂の下社神殿を祭りたる

人をよみ侍りしと　前左大臣

竹河入里にありしとはにうち荒果たのみそときこえくゆくへへぬる

賀茂の臨時祭かへさのうたを

皇太后宮大夫俊成

月さゆるみたらし川に影みえてこほりにすれる山あゐの袖

大納言実家卿

百敷や庭火たくくきぬ物ならにほさきも神遊ひなるひとつ神

題不知

右京大夫季能

あさからぬちきりを思へはいちしるき流れにたえぬ石清水かな

石清水乃社の千年に社頭の月といふことをよみて

奉りける時

右京権大夫藤原隆信

榊葉にそのいふかひはなけれとも神に心をかけぬまそなき

四位してむかしおもひけるに春石清水乃臨時の祭に

日陰の事をつとめ侍らさりしに舞人にて陣にいて

侍りしをおもひいてゝいひつかはしける侍従成隆のもとに

侍従にまかりける時

左近衛少将藤原定家朝臣

立かへる袖もかはらぬ日かけにてうき世のまつも山あゐにかへて

返し

侍従藤原成隆

やよ石清水のをちかへりむかしにかへるしるしにて神や知らむ

きりをはらやゝ〜ちまきまうてゝよく行ける

雷蓮

金ちゝ〜ちかゝやかせたまふぬしの雲の花ちる社の花

いかゝとは河のあるれ湊と為ものもとゝ為ふ和ちなる

厳鴻社は海ゝ川とゝくらしまもれまりてゝ

海ゝ乃松といふ人〜後行ける

おゝさ大伝

高くとかゝたるあさ花ゝまつとゝ高乃神

住吉社松書付られる

前大僧正覚忠

神代より松のゝとゝ花ちる

陸寛法師

うしとみる世ちかゝ人ゝ

後白川院天王寺ゝ百日籠りまし〜ける時人〜

ゝゝらしにまうゝ後行ける

ちうらや御ゝ今ゝとゝ

為家卿

為ゝ来て人乃とまる住吉ゝ浦のなゝ人ゝ

百首ゝ

住吉ゝ海ゝ神紙ゝ後行ける

摂津ゝ大阪ゝ下

すくはれぬるこころにかはりてこそ神のちかひにもかなふらめ

賀茂にまうでてこの事をいのりはべりけるなかにて

くむしのこころをしるべくもあらぬ

大納言実氏

産の宮にまうでたりけるを見あはせたりけるに

いまさらに申納言はなにをかはいはんとかはりけるに

ちはやぶる社の藤とうちなびくこころにかかるなりけり

春日社にまうでたりけるに中臣

左大臣

百首の中に神のこころを

神のちかひにもかなふらめ

法性寺座主法印

ひとのこころの手向にはかりあらはしてこそ

内宮にまうでたりけるに

民部卿藤原定家朝臣

ふ倫にたのみをかけまくもかしこしやうらぶれぬ神の思ひ

ちはやぶる人くふるさまをかりそめ

殷富門院大輔

夏海やそこのこころのかのくもをかのくもをかのくもをかの

かりそめにこそ百そのこころをかりそめにこそ

久方の月のかつらもいかなれば
さしてのみ見るものとなるらん　皇太后宮大夫俊成

百首の中に神祇の心を
みるかしこしとおもふにもなほ法なくなるものとなるらん　隆信朝臣

石清水社の奉合に寄神述懐
ちはやぶる神のうけとる法なれば
契ぞ我が宮ぬ奉合にいはるるを　法印静賢

春日社の奉合に社頭花月
春日社の奉合に社頭花月
春日の社の百首に
世代をへぬ言葉なれば
攝政太政大臣右大臣に
奉ぬ中に
侯伯

俊恵法師

三笠山あふきさく藤の紫はさかゆる春日のさかりなるらし

神祇歌とて　法性寺権法印

もろ人の祈りしことをあはれとはしるしをみせよかみのよ

皇太后宮大夫俊成

ちはやふる岩もる水のためしにてとこしなへなる宮ゐもよほす

日吉社にて月を見てよめる

隆寛法師

みちひまてあきらかなる日吉の宮のくもらぬ月の光

北野社にて人々よみ侍りけるに紀時文乃ちゝ

とゝめくらんなを

鴨長明

しめかけしむかしにあはれむとしよりあはれむ神のまつ人のたえせぬ

題しらず

圓位法師

流れたえぬ波にや代をはおさむらん神風すゝしみもすその岸

さやかなる鷲のたかねの雲まより影やはらくる月よみのもり

後白川院位におはしましける時やよひまくらのまへに

なかのとしことくにはかりよみ侍りける

紀二位

たちかへり代々のけしきにみゆるかな今日住吉の松をとふにや

松の歌とて

皇太后宮大夫俊成卿

うきさかりつゝ人をあはせてもとかたらはあれやうきをしらせ

中宮厚次の御屏風に春の景色かきたる所に

左大臣

雲のうへまでおりたちてとりつもるさくらのはなはたとへてもみん

白河の天皇御屏風にさくらをたてるをかきたる所に

左大將定家朝臣

同じ屏風に秋の所にかきたる所に

拾遺抄上終

秋代にはなりくるかはるかはすゑのつゆしもはかりにてしらん

拾遺抄上

厚次の御屏風にすみのゝうへにたてるをかきたる所に

そのかたをよめる

拾遺抄上終

左大臣

雲のうへにたちのぼりけるはるかすはたゝのやまのかすみなりけり

左大將

なつのよをたゝかりにしをしらぬかなあけぬるものとおもへばかな

巖乃手とく

天地部上

厚次の御屏風にすみのゝうへにたてるをかきたる所に

そのかたをよめる

拾遺抄上終

左大臣

雲のうへにたちのぼりけるはるかすはたゝのやまのかすみなりけり

左大將

なつのよをたゝかりにしをしらぬかなあけぬるものとおもへばかな

巖乃手とく

皇太后宮大夫 俊成卿

ゆくへなき思ひしはそ袖くかへとめとも露の下にも沖つしら波

題しらす　　三位中将公衡

唐衣露乃ちはに思ひそめつる秋の奥の春の夜の

大原野にはやてく松原乃霧をしらく

皇太后宮大夫俊成卿

春やすき立かへるしかまの山小萩か原の浪ふことなき

摂政前太政大臣女太政大臣おほしまちのこるとそ知合を

さゝ波乃よそにかくる霞乃くもゐとを

太宰大弐重家

たなかるる春の夜乃夢乃ゆくへはしらすたゝくもまにかゝる海

寂蓮法師

立帰りてきえなかや越ゆる霧のもる夜に春の月の山

俊恵法師

さ川乃井る塩ひのかゝ袖乃夕暮春の雨のにはにかゝる

百首歌中に春の心を

法性寺入道前関白

あさ乃は八幡うすかすむとみゆるかなたの八重山やまのかすみ

題しらす

定家朝臣

思ひやる縫はしめし緑のそらにまよふ春の夜の

前左大臣家の十首歌中に杜村霞といふことを

新勅

湖戸あらしの伏す人乃里まもるひとのこゝろ井浪
百首哥たてまつりし時 藤原行能朝臣

皇太后宮大夫 俊成

中くゝふみなれやこゝろ成ぬらん霞をうつくしみ春乃
夕ぐれ乃雲乃すがたゝ

二位中将 公衡

大ぞらに立てゝ乃ぼるもなかなかとゝ雲乃うつくしき春乃山里

題しらず

俊恵法師

何やらん高砂乃山乃ゆふ雲乃人めをうすみ花ぞ咲ける

隆信朝臣

ふかゝ秋乃雲ぞなびくゝ萩乃ゆかしやけ乃

前左大臣

雲ぶかき峯乃ゆふ風乃なくゝ聞ゆるゝ音乃ゆかしき

百首哥中に春乃哥

隆寛法師

今ぞ咲く乃ぞ海ゝ乃人くゝ乃雲よりをゝ乃ぼる花乃ゆ

晴真法師

山ゝ乃ゝ世乃ゆゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

法二位 [illegible]

月ぬすむ雲のたえまをたどりつゝ山ぢの春の夜をあかすかな

左大将

おもかげ成ぬるかたに春ぬれば雲のたえまを月ぞ恋しき

新古今

宣家朝臣

物思へばたゝぬ日もなくなりにけり春の光をなにとかはまし

前播磨守藤原隆親

行ゆくはまこの浦むすびかたしなれぬ人にあはぬ道

望山待花といへるこゝろを

皇太后宮大夫後鳥羽

ふるさとは雪やらぬまの山ぢにもとりの声にぞ春はしるべき

賀茂乃社の千首の歌の内

顕昭法師

秋のたゝ初風ふきぬれば山ぢの草ぞ色まさりける

覚盛法師

たつの内ぞ秋はまつ虫ぞ鳴ぬる

藤原親盛

吉野山ふるさとの風ふきぬれば花のうへにぞ秋はなりける

後恵法師

夫木抄ニ入ル

新古今

法橋宗圓

雪のゆきまもなく消ぬるかぎりなき世界をうらやましく思ふ

たのもしき分今は霞のたちこめてとよそにもみる

義承僧都

雲ゐにてうつもれぬ雪をかぎりなき海の面にたちこめてとよそにもみる

海の面に霞をうつもれぬ雪をかぎりなき

顕昭法師

家のまへに雪かきのけてゆきかぶりたちこめてとよそにもみる

雪のうちに酒をくみ出でうたふ雅俗の思ひをなぐさめ

千命は霞のたちこめてとよそにもみる

朝惠法師

東海岸あさたの浦をよ御堂にたちかへりたつひとりさ酒のたち

題しらず

太皇太后宮大進清輔

鶴の子のうゑのみ山の松や煙たちひろがれる雪の駒

大江公資

生ながらやぶる氷の花をけちまつ末ひとはなくしたちまつ

赤染法師

木の葉法師とうの雪の花のうへにたちかへりたつ波

龍大將

雪のうへにたちかへりたつ雪の春なれば紙の白山

大江公資

住よし社前の川波と共に新しき世を待つ春雨

百首歌中に春雨を

藤伝弁

さそはれぬ人の宿なれば雨の音に袖ぬらすとは思ふ

侍従家隆

沈みなく水とめ所定まれる雨の名残の夕暮

五月雨代掻を詠ずる

播磨前司為定

あやめ草ふかの下ねの水波乃ちかなる神

大納言実為

住吉社に小河と云ふ所なるべし

左兵衛督隆房

五月雨の頃あさ瀬を渡りかねて小河の水の深くまさるか

宮内卿為定後撰

さつきやみ道なき山のつゆ分けて人の見ぬ花の香ぞ

かりそめの水上問さる泉河の山吹の花の色ぞ

資盛卿家の千会に五月雨の頃ぞ

第蓮

菖蒲葉の五月の秋を小人とて人の見ぬ花のさそ

牲家法師

浦うちとをしほるれはあまの袖さへくちぬ雲のうへまで　藤原法師

山里乃秋の夜あけぬとて井の水のもとにすまひしたれの法

後鳥羽法師

あきの夜の月をあはれとおもふ人のあはれをしらぬ人はなしけり

時宗法師

ちとせまつれぬるちとせあらはあれ　宗尊親王

百首歌中に五月雨を

花山院前内大臣

山里乃秋の夜はかりをしらぬ人のまちなとして五月雨をそ

月雨をしたのはの人はのこりけるつくしの人をそ海とをしける　寛蔵法師

ちとせをしたちのつくしの家をあはれとおもふ河の美人

藤原親盛

日数をつもりてはるかにあまの法をあはれとおもふ人の法師

泉留守所

せをとをしたちのつくしの人をとをしたちのつくしの人をとをしたちの

紀之元

大納言実国卿

二位中将公衡

ちぬたるよ猶松のとぢめをたちぬ間しる

きえぬるもしらぬ山をたづねてし秋の暮にぞあはれ

家隆

泉為夏橋とりの心をとらえる

たづねてもとはるるものは柳陰くるるを花や夏のあるじ

俊成

題不知

為氏

為氏の清水ながれて柳をしたしみてこめ我ちとりて

泉静来枕とりの心をよそえる

あら月は秋やなぬるむ忘れまとぬ水のもとに玉ぬきてし

後鳥羽法師

澄の色に岩ぬきとおしてこの音をけさはしらせてくるるもとなる

題不知

岩波の末にいとふ所なくむすぶ庭に忘れぬ

題縁法師

御屏風に納涼しるるを

皇太后宮大夫俊成卿

ちぬ西に秋をしらせ山の井に住むほ里の人ぞ知てる

左大将

山陰やいつる清水の秋をとの千なりの音ぞ

左大臣

をの清水ながれ入まりをとの夏の秋の色

雜地奇下

月乃和とくらゐを給ふ

紫德院御製

和てをなりはしをひとたてしかはしらぬ
はるかなるみちのくにまでなりにけり
秋もはてぬとしのくれ

第九大臣

はるかなるみちのくにまでなりにけり
桜宗大納言公通

秋もはてぬとしのくれ

頭中将

大納言実家卿

をしたれくるはるをしたのもくさまてはなのけをはらん

百首中に春の哥とて

左大將

さらぬたにあるにはかりをしたれくるはるをしたのもくさまてはなのけをはらん

今宵たれとしたれやうきをしたれくるはるをしたのもくさまてはなのけをはらん

雲間乃やとしたれくるはるをしたのもくさまてはなのけをはらん

前左衛門督公夫

あるしらぬかたをしたれくるはるをしたのもくさまてはなのけをはらん

左馬頭兼盛

嵐風ふきはらひてとしたれくるはるをしたのもくさまてはなのけをはらん

叡感殿長

左大将

月あきらかなるを見て秋乃よの月

法性寺入道前太政大臣

命とゝく

皇太后宮大夫俊成

月清き秋乃あけぬれとも星ふる雨なをけう

侍従宰相中将

合せて秋乃月ゆゑとゝく

前右兵衛督定家卿

きゝやはしるまつ山ふかき月乃ゆゑ

刑部卿頼輔

秋乃よの月のうき雲をはらはなゝ

秋乃よの月のうき雲をはらはなゝ

右兵衛督

月ゆゑとゝく

三位中将

安中納言ひとつ雲の月ゆゑ

月ゆゑとゝく

大宮内大臣

今宵小月ゆゑとゝく

権大納言

大宮内大臣

月ゆゑとゝく

秋乃よの月

田家暁月といふ事をよませ給ける

二品法親王 仁和寺

あけぬとて山田のいほの月を見れは今そ門田に鴫もたつなる

百首歌中に月の歌とてよみ侍ける

法性寺座主法印

よろ月にかはらぬ池の門田にはやとる秋のすゑのほとも悲しき
秋の夜の月をあかすも見るへきに雲ゐにさそふ荻ふく風

題不知

前太宰権帥 敦

おもひ入る人の宿にも月さえてなかむる心山のおくなれ
秋のよはいつもいつもつきせぬものを今宵月のかけそさやけき

太宰大弐重家

月さよみ思ひそあへぬ山なるを河せの年の雪にかあるらむ
安戎のかれくすゑのもとに秋風あまりく待かねつゝ

皇太后宮大夫俊成卿

萩かひとへやりまて秋のみやこのそこひはかなきはかなくそ見る

崇徳院百首歌中に

月くまなき秋はさらにもなかむるにいつの世にまた人をまちけむ
蓮葉の世をいとひ入る野にかけてのちそかきもくもる月かな
法のため萩の枝にも小篠にもかくるや月のかけそすむらむ

法印静賢

山端にいでしつきのやどるあるじをまち

法印範玄

ふかまより月の入るを秋のよの光をそへぬあくるなり

すまれぬるうまたちのあるをのあるを月をこそ

法橋光範

月をのみ待といふをりをりの

隆信朝臣

さらしなやおもてをまもるをしまもるの月の

皇太后宮大夫俊成 俊成卿十首中人くりを詠

月をのみ待とてやすらはるをりをりの

月をのみ待とてやすらはるをりをりの

藤民部卿成方朝臣

月をのみ待とてやすらはるをりをりの

百首歌中に月をよめる

寂蓮

いにしへの月をのこすもうらさびて

五月の月や波まのこがくれ

なつのよの月をのこすもうらさびて

法橋定覚

なつのよの月をのこすもうらさびて

清きを月に洗ふ秋の波
人も老いぬ山もたのもし

秋の夜の月の清水にすむ人
はいかなる桂男の影か

百首の中に月を
よめる

雅家法師

雲ぬけて月をぬらす暮の
秋小雨の人を我が袖に

題しらず

宮内卿藤原成家

月にこそ清滝川の岩波
のかけもたのもしの

前伊豆守源仲綱

月に新しき清らの流れ
みはて

隆信朝臣

行く末はいかなる人か月に
見ん今宵の月の

家隆

月の光は清くも秋の月
の影は知るとも

崇徳院御歌

思ひ出でて月を見ん時
の心は

乃信朝臣

月にあくがれ
ぬる

家隆

苔の下に月を見ん

藤原

民部卿の宿義家朝臣

しら浪もひとつにさえてゆけは月にふきかへるかきあらしの風
旅人のわらゝもあかすや秋月をさそへかへらん
源仲綱
あかしかたぬるゝ秋まやとりては月よりねぬるたゝうつせよ
題しらす
隆信朝臣
こ雨もなく月すむ峯にあかなれぬる里の山の端にかゝる
藤原知賢
里わかぬくまなき秋の月なれはふけぬ秋の月を浦のかたにいつみせよとく
名清き乃寺の今宵月の影なりける
法印静賢
おもふことやわすられて風さむみ吹上の浜の月をみむとは
題しらす
法橋宗円
松かえに月をとゝむるしら波のよる人もなきよしの浦
あはれもみちらぬ秋の夜の中に思ひもわすれぬ秋の月かな
信縁法師
たくひなくすめる月の露よやとりの山に月かけを手にとりて眺る
摂政前右大臣に侍りける時家に歌合
旅宿にて月の心をとて
俊恵法師
照月のたひねのとこやしもとしも秋の夜ふかくたちゐる人もなけれは

中空月終乃浮海風よ月池水に浮りたる秋哉

よ晩陽

左少将定家朝臣

あさ涼の世みつく雲井にくもる月乃光ぞ何も庭に秋なる

寄ニ雨

寂蓮

月影はいさく浪なく定まる光て秋乃雨する松虫の啼かな

月さえてみむの浦千鳥見しはるさとは夜半まさるさ去かねかる波

暁月秋去ろのかしよ

覚蓮

行やたなく明けぬと浮くる鳥乃音にうちかけさるそ残る月かな

道因

山のはに入来る秋を恨らむ宵秋まだ出ぬと月を恨みけるかな

菊にしつらはれて秋の名けぬ世を捨てしもなき物とよき

円位法師

夜もすがら我ならぬ世を心を月影になれ秋乃夜の月

あくれなくあれ住むともいさ月も秋あふ秋の夜

うき世にはなかなかのけき秋の月なかむる心に物をかき

源季貞

以前へしのぶぬ月影もかれぬかな人様恋しき

藤原公信

なかむ世も月あはれそむる秋乃夜の月の光をたかひこさ給ふ

大中臣定雅

秋の野にうゑしをみれば月ぬきの花をもとをる人ぞなかる

思見ずといふこころをよめる

惟宗廣言

ふるさとの雁鳴ぬなる秋の田のかりほの庵にとまりぬるかな

新古今

中臣有安

あくがれむ人と思ふ秋なれば身にしみてこそ物はかなしけ

殿富門院新かの歌

大輔

ちかなくて雲ゐとぶなる雁ぞ秋の月をかすめる

おのづから秋のたもとをかすめる夜月をあはれとぞ思ふ

皇加門院前内侍

さらしなや月ぬく袖のぬれやとぬ入りぬるかな

左大将家百首寄月の中の月のうつくしきを

藤原家隆朝臣

床の上にあかしの月をひさしてあきぬ入りぬる秋の

月さらしなをかたらひつる夜の月をあはれ

ちりかかるむら雲の月のかたぶくまで秋風ぞ

月のあはれとぞいふなる

太皇太后宮小侍従

百首歌中に月歌とて

摂政家丹後

さとの海なる松をもる月をみるか
山のとをくるまいのあはれやそふ

法性寺座主法印

有明の月の出をまちえて野ちかくへうけ
山のをくに入ぬる月をまち出てはのちなほそう
入ぬるをとゝ海の底まで残りなくてあるかの

左大将

秋ちかくなりぬるかとの月をみて
おもふ秋の月をまちいでぬるかな
うきをいとはぬ人の心をもとめ
百首歌中に月歌とて

皇太后宮大夫俊成

月をみるなくさめてなくこゑ
師光家の子合に月歌

後鳥羽法師

久かたの月のかつらをたをりとて

百首の中に

左大將定家朝臣

さしもとる袖の秋の夕ぬれて露ふかくなる月の影かな

月清き秋の夜ふけぬとて唐衣うちかたしきぬる袖かな

題不知　登蓮法師

浮雲は清き光を隠すなり澄まぬ月をもとめ来ぬれば

清き世の月をもとめ来ぬれば浮雲なりけり

行上人とて人々よみ侍りける　信定法師

よ[illegible]の月を波は袖にくだくとて秋の夜ふかく

故郷月と題をよみ侍ける　常円法師

ひとりすむ人の心ぞ澄まずして秋の夜ふかく

海月と題をよみ侍ける　大納言実氏卿

海の面の月とうつるかな

[illegible]

[illegible]

歌右衛

源資通

世間のあなうらやましきたれかのぞとふ秋の夜の月

素覚法師

篠波うちあらのはもあらはすしめゆふ秋の夜の月をみて

海上月をよめる歌

祝部法師

いるかたをしたはしかりつるまぐひ月ふねのうちにいりぬ海の上

敬上西うしけうとの月ぬしをあらはすらん

常念

たとしなるかたをしたはしかりつるまぐひ月ふねのうちにいりぬ

歌をよむ

雁渡るかりがねきくとしたはしかりつるまぐひ月ふねのうちにいりぬ

常超

ふるさとの里人とおもふ秋の月ものうらやましかりつるまぐひ

故郷月をよめる

ふるさとの里人とおもふ秋の月ものうらやましかりつるまぐひ

不為里人愛秋月

詩合に秋月をよめる

藤原兼康

あきのよのなかばにいでぬ月をみていかにかくらしまつらむ

海辺月をよめる

隆覚法師

法橋慈慶

法師

平康頼

律師 證尊

法師

藤原超

題しらず　寂然

あらしのみ吹くとはなしに夏の月
山路晴れとは思ひもよらぬ

性覚法師

落ちかかる松の梢の夏の月
中空なれや月の清風

雲ゐ

雲ゐとはいとゆゑ深き夏の月
野原より煙の立ちのぼるを見て

拾遺古道大臣

ひとしきり雨の降りしは風ぞ吹く
前左大臣

山の端はいかなる人の手ぶりにか
と麻なくに小萩ぞ咲きぬる月さえぬる秋の風かな

新ふる

藤清貞

なほ小ぶりとなほさえぬ人ぞあるもの思ふ乃
月次乃山風ぞ吹くとはなしに

摂政前太政大臣

吉野の里の夏の夜の月
煙ぞ立ちのぼるなる塩屋なるべし

隆信朝臣

浪はつひとも見えぬ秋霧にたちこめられぬ波の音かれ

百首歌中に秋の心を

左大将

山猿の声にかなしき夕日かけ尋ねくる夜のこゑのかなしさ

白妙の雲のあるさへ寺人々しく過し行中り

いなつまのまとふ心も紅葉数の山を

二位中将公衡

戸にく妻いせまつ代に山鳥の尾にわかるゝかくるゝへの哉

左少将定家朝臣

稲つまの光をいまはたのむらむたのもしき風の袂ハ哉

題しらす

むら雲の絶間に宮あかすみえて志らぬ色にやみゆる山の端

遠村擣衣といふ心を

大納言実家

あさやこそ秋の衣のうつ声の聞ゆる夜半に衣うつ里

題しらす

右京大夫季能

霧こめぬ秋の山辺やみえさらむ人もなき山の里

田家秋風といふ心をよみ侍ける

因経法師

おとつれて友よふ葉の風そよきまつさひしき秋の夕くれ

題しらず

人こゝとゝぬ雲井まう地をつくるとしたらん雲井百敷世間

清輔朝臣

雲のまに消えのをとゝ小入まちうつる秋風をとゝ

雅経

きゝ慣ふ波のうつるみ明石のよ源ちとゝ海ちとゝ

百首歌中に秋の千とゝのよろ歌

前左衛門尉家隆

あまとゝ野原つゝ花のうつ秋ちとゝ雲井

いつくちに霧おりしとゝ入ちとゝ

寂蓮

ふく霧に和とゝ底のあちゝ小ちとゝ

旁隔行舟とゝ小ちとゝ

前摂政太政大臣

いせ海やいそうつ波のあちゝ雲井

歌しらず

日法法師

袖ふる小ちとゝ秋風をとゝ

雲井にとゝ月のうつ

法性寺入道前関白太政大臣

ゆ波ふく煙とゝ雲井うつ

大うの業ゆくゆくは学問をしてうまれ山に月をてらす野

頼不知

経波うこうちはれしきちる秋萩の露ぬれてのあ

二条院参河内侍

とら寺をさ当ゆうつまひ三笠山ふる雨の音

侍従家隆

ひ野ゆ方をてゆ行けるは大原野の雪ゆ

ひゆうこせいて千とせ分ようこゆ法ゆうゆ雪ゆ

承位法師

ひゆゆ秋ゆ桂乃ゆ法ゆうる月数ゆ生きてゆ

ゆ生ゆふうこはちゆ山ゆあうゆゆとゆ月ゆ乃法

前大僧正

紅ゆうすさゆ秋ゆ紅ゆ神ゆ山ゆ桜ゆ人ゆ

紫ゆう

崇徳院御製

ゆうしゆ紫ちうゆ山ゆうゆ紅ゆ山ゆ

皇太后宮大夫俊成

牡ゆゆゆ牡ゆ雄ゆう俊乃ゆ鹿ゆ松ゆ

百首中に

秋ゆうける

定家朝臣

数ゆう波ゆうゆゆ牡ゆ一秋ゆ月ゆ

仏法家隆

くもりなきやなかめし人もなき宿の月を秋まてしくれてそ見る

隆寛法師

寂しさを忍ふまつさへ時雨して色こそ見ゆれ山里

軒の月かれ思ひの宿とれむらむしくれたる庭を清く染めけり

百首哥中に霜乃心をよめる

中原仲業

忘れやは我もかもしみるなる露はかまとしはしらくたまるかな

山里時雨といふ心をよめる

源仲頼男童

吹風の嵐にかぬる紅葉山しくれてゆくか入日入乃秋

題不知

木乃葉ちる外山のおくは風よりも時雨の庭乃冬はさひしき

秀経法師

秋篠やとやまの里や時雨らん伊駒の嶽に雲のかゝれる

円位法師

月残るまゝの松原雲きえてかくやあら人なる神しくれ行らん

俊恵法師

様もとよりしもよそに見ゆる物を秋さへ時雨の空に

ことに時雨の雲の往来ともしくれ果つらむ

覚盛

せち雨の山めくりしてみ吹くるも我にしくれて外雲の空

鴨長明
湖ちかき横川にすみて侍りし頃秋ふかき夜数あらそひ
り比叡の山にのぼりて侍りしに山風いたく吹て月
のくまなく侍りしに法性寺座主法印坐
五十首乃歌読て奉りし中に
定家朝臣
秋乃夜のゆくへあまたのまくらにもむすひぬ夢は月に眺むる
思ふ代のかたみに
左大将
霜さゆる松風板屋のめもあはて干わひぬ袖に月やとるらめ
同十首乃中に
定家朝臣
かゝ乃[illegible]よひはこれぬ身のうきよをいまさら山風に
つれなき
法性寺座主法印
紅葉はへたて来たる蔵ぬる山風もなかくちりぬらん北川かせ
左大臣
秋乃名残をたゝぬ梢より山路をこえて宇治乃川なみ
同時あまたよみける歌乃中に
法印
あらしふく山のかけぢのもみぢ葉は我宿なれとなきかなしき
百首歌中に
式子内親王
まさぬる嵐にたゆむ時雨竹乃さ枝にかかるてまて

大井川をこえ侍りけるに風はげしく吹て波のたちかへるを
見て

皇太后宮大夫俊成

新ふる
はつかりのなきわたるこゑにまかせてこしの白浪

二位中将公衡

東路にあらしの山をこえあぶみ
をのこ山のかすみ
ゆふ雲の
をのこ山
行末の
をのこ山

俊信朝臣

あらしの山
をのこ山

源資清

百首の中に霞の
をのこ山

橋惟村

雪をのこ山
をのこ山

寂信法師

山岳雪深こりつゝ仏ぬぎ給ふ

藤田法印

さゝのとゝまりつゝ人とゝめぬ山のゝ名

按察大納言大臣右大将

合せて月ぬぎ給ふに雪ぬぎ給

皇太后宮大夫 後成

雪ぬぎ給へとゝ雪ぬぎ給ふ山ぬぎ給

中将

月ぬぎ給ふ雪ぬぎ給ふ月まつ人とゝ給

月ぬぎ給ふ大内の女房あまつゝて法性寺の

ぬぎ給ふ仏ぬぎ給ふ師光乃家

雪ぬぎ給ふ

右衛門督 隆房

ちゝとゝ給ふ雪ぬぎ給ふ

あゝとゝ給ふ北の方ぬぎ給ふ

忠季

月ぬぎ給ふ雪ぬぎ給ふ月ぬぎ給ふ

大宗権大夫源頼光

中宮屏風乃内侍屏風ぬぎ給ふ

左大臣

雪ぬぎ給ふ仏ぬぎ給ふ花ぬぎ給ふ

左大将

おしなへて花ゝ池とたえけむ里の外の雪の明ほの

同御屏風に池氷

池水はさゆる夜すからきよく見えて氷の月ぞ渡りける

隆信朝臣

さゝなみよする池の汀の薄氷かたよる月ぞ夜すからの里

題不知

中納言長方卿

冬ふかくなるまゝ池の水まさりこほりてなかく漂ひにけり

中納言親宗

冬深き雪のこほりもいつしか池の汀は氷やとくらむ

宰相中将定時

山里のあさけの水もいはれぬしとむすはうそもなかりけり

太宰大弐重家

冬さむみそこあるもこほるにあさきにて川のせや淵もわかれぬ

泉河まくらの夜はにこほりけり住よしの汀に夜はもゆかなて

住吉の岸うつ浪にあらたまの年のさきさむき浪のしつくも

冬の夜はさえしつ床にこほりけり汀のかけの空の氷の

読人不知

おもひつゝ思ひ出ぬとおもひぬるこほりしもとけぬるさまの

民部卿成範

山里の池のこほりのきえぬまの冬に君まつ人そすくなき

この今年冬月こしのふるさとの

前太政大将 公重卿

月ゆきかよふ雲ぢにまよふ雪の夜の

新ふる

とのゐしてをとこ共物をかきまぜ若の字を

書けるを見て

藤原乃為氏

暁望山雪

雪はうつもれぬ山のかけはしの

まよひはてぬ跡をたづねて

高倉院御製

音羽山さやかにみたる白雪を明めぬとかくる高の

題不知

法成寺入道前関白太政大臣

清原元輔

清水こそ汀の月をすくふなれ波のやどりを

宮内卿

漢ゆゑもつくへうたなれぬ人雲ゐ

師光

雷はかりの新たなれの山ゆゑ

仏法房澄

きさらぎ乃あけぬ夜ふかけるを

隆信朝臣

中くらいやまいあくに成よりの事をかり

大原りの雪乃所とくとあ

雅経

百ちゝ千中に冬ぬ可ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十四日乃塔婆を雷に打れ焼ぬ
仁和寺二王和尚三宮の胡遍照に初て参
高人〳〵所々高七尺ばかりなる
玉ちるおしむと書くはちるものかなり
大師御筆歟うつせ小ひさきつくり
四位法師
はかなくも龍ちるまうちれく雷あり
法橋 覚範
[illegible]

法橋 宗日
[illegible]
山家冬月とはあらしの
性覚法師
業乃為に新のうるおれてひつる老の冬の月
[illegible]
浪入道親生
いせの海しおちるまれい演歌の和尚小者とかの日
百首の中に冬のの代々年を経る

前欠院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

入道参議 修範

有酒の[illegible]

[illegible]

左大将

[illegible]

法性寺殿法事

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百首寄本恋歌　　皇太后宮大夫俊成

[illegible]

侍従宮内卿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

晴真法師

[illegible]

法隆寺座主法師

[illegible]

氷室

[illegible]

山家遇春

[illegible]

[illegible]

山家紅葉

三位中将久衡

[illegible]

清白為門子孫之家世世不絶
山里之人生涯之業專專不斷
河水之流長長不絶

清輔朝臣

年積月重学問之道代々家業之業
百首歌中佛寺千載之作家々歌

信光

内閣文庫

群書類從後卷第百冊九上

国立公文書館
National Archives of Japan